

2013 年度 チャレンジセンター第1回ミニセミナー

概要

日時 2013 年 6 月 19 日(水) 16:30~18:00

会場 15号館4階第一会議室

参加者 チャレンジセンター教職員約15名

第1部 2012 年度 チャレンジセンター学部等研究補助金助成研究報告

(1)情報端末を活用したプロジェクト型授業内容並びに評価に関する研究そのⅡ

◎岡田工 崔一英 堀本麻由子 園田由紀子 尾崎由佳

グループワークなどを中心としたプロジェクト型授業における、情報端末を使った研究について報告された。これまで、プロジェクト型授業でプレゼンテーションを行う場合、模造紙や書画カメラを用いることが主であった。また、パソコン教室を活用した場合でも、プレゼンテーションソフトを使って個々人が資料作成や発表準備をするため、グループワークとして教育効果を高めることができなかった。そこで iPad を用いることで、一般教室に置いても、情報検索、簡単なプレゼンが行えるようになり、模造紙等に比べ、動画や写真などを使った効果的なプレゼンテーションをグループワークの一環として行うことができるようになった。実際の授業では、約10台ほどの iPad を使い、グループごとに簡単なプレゼンテーション作成させた。複数 iPad のデータを管理、共有する際は、iCloud のオンラインストレージを用い、毎回異なる機器を使っても情報を共有できるようにし、教員の端末管理を簡便化した。特に、効果的だったのは、グループ討議をベースにした共同作業が可能になったことである。これまでは、グループワーク等を多用するため、一般教室で行うことが多かった。これは、学生同士が顔を突き合わせ、討議をし、共同作業の中で、コミュニケーション能力の育成などを行うためであった。反面、効果的な教育機会の一つであるプレゼンテーションでは、デジタルコンテンツを用いることが一般化し、準備は、パソコンが中心になった。そのため、ソフトを使った発表を行う際には、授業時に一般利用可能なパソコン室に移動して作業を行うか、パソコン教室でグループワークを含む授業を行うほかなかった。パソコンを使うことで、メンバー全員での共同作業は難しくなり、特定の学生の負担を増やすに留まる傾向が見られた。これに対し、iPad を用いた授業取り組みでは、グループで1台の機器を囲み、相談しながら作業を進めることができるため、学生の参加意欲も向上した。現在の環境では、iPad で利用可能な簡易的なアプリを使った作品作りにとどまるが、今後は、マイクロソフト社のアプリ用のオフィスの発売が予定されており、情報端末を使ってパソコンと変わらない作業が可能になる。さらに、アプリを独自に開発することで、授業での活用が広がることが予測される。



(2) 「「定点観測」手法を使った実践的取材ノウハウ教育の開発」

岩田伊津樹

ジャーナリズムを学びたいと考える学生に対し、効果的に取材の方法を学習させるために、実際の取材現場で用いられる「定点観測」という手法が最も有効である。今回の試みでは、福島農家を取材対象として定点観測の手法を体験させた。このような教育法の開発の目的としては、履修学生の様子から、コミュニケーション能力の著しい低下、さらに、積極的な問題発見能力に乏しく、基本的には指示待ち状態、さらに、取材において最も重要な「おもしろさの発見」ができないという重大な課題を解決するものである。定点観測手法は、ある地域に一定期間、その地域に居住し、その後一定期間を空けて、また、その地域に居住するというように、定期的に定点に入り込み取材する手法です。前述したような学生が、全く知らない地域の人に取材に行くことで、積極性やコミュニケーション能力、新たな発見を経験的に学ぶことができる。さらに、毎回同じ地域に行き、同じ人にインタビューを繰り返すことで、学生は少しずつ打ち解け、会話ができるようになる。今回の取り組みで定点とした場所は、福島原発から60km離れた福島県岩瀬郡鏡石町である。私は、3回福島農家に訪問し、学生は2回訪問した。学生は、2012年8月に第1回目、2013年3月に2回目の定点取材を行い、その際、除染作業の現状を取材するなど、周辺にも取材対象を広げた。除染前後の放射線量を測定、比較したところ、放射線量が劇的に減少しており、除染による効果を確認することができた。8月訪問時に、盆踊りなどの利用のために公園の除染作業を取材したが、3月に同地を訪問したところ、線量が非常に減少していた。さらに、読売新聞社福島支社を訪問し、被災者への取材の現状を取材した。被災者は、厳しい状況が続き、不安や不信を抱えていることが多いため、その取材には神経を使っていることなどを知ることができた。現時点での定点取材の効果は、2回の訪問に留まっているので、最終的な結果にまで至っていないが、学生の積極性や自ら発見しようとする態度には変化がみられる。最後に、福島を定点とした取材において、どうしても触れなければならないのが、原発事故の影響についてである。定点でのインタビューによってわかってきたのは、住民、被害者の人たちの原発からの意識の逃避である。もう考えたくない、思い出したくないという逃避的感情を持っていることが分かった。さらに、現場での定点取材の成果としては、被災地を風景として観察すると、植物も生えるなど、一見すると、元の状態に戻りつつあるように思われるが、人口は減少を続けていることがわかった。事件記者のような御用聞き取材(なにかありませんか〜と聞いて歩く取材)ではなく、その場借り着ではない人間関係に基づき、その変化を深く掘り下げて、問題を発見する定点取材の有効性について、学生たちの理解が深まったように思われる。今後も、この定点観察を継続したい

質問1) 社会学や文化人類学では、フィールドワークによる調査手法が存在するが、今回の定点取材の手法との違いはどんなことか?(園田)

岩田) 基本的には、フィールドワークの手法と同じである。

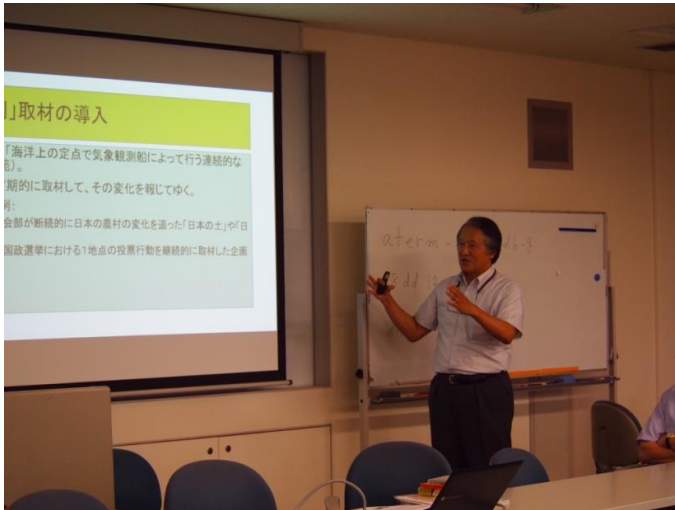
園田) 学問的裏付けがなされている手法を使ったジャーナリズム教育として、学問的枠組みを示して研究を続けられると良いのではないかと思います

質問2) 収入についての取材は行っているか(山口)

岩田)いきなり収入についての取材は難しいが、厳しい状況が続いていることが続いている。ここで、一つ気になったのは、対象の農家が、自分の農地の除染を自ら行ったという話を聞いた。これは、除染を行うことで助成金がもらえたりする仕組みがあり、自ら積極的に行ったのではないかと推測される

山口)(商品として)売れない分は東京電力に保証を求めているのか

岩田)保証金を得るためには膨大な申告書を作成しなければならず、ほとんどの人が活用していない。



(3) 「ルーブリック活用による目標設定・評価に関する研究」

○園田由紀子 尾崎由佳

これまで、チャレンジセンターでは、ルーブリックによる評価の方法について検討を行ってきた。2012年度教育研究所の紀要に投降した論文をもとに報告を行った。今回の研究では、授業の事前、事後にルーブリックを使った学生による自己評価の変化から、ルーブリックの効果、評価の活用可能性について検討した研究である。今回の調査では、尾崎先生が実施された事前、目標設定、事後の3点評価の比較を行う方法を中心に検討を行った。結果、学生の自己評価をもとにしていることから、客観的な成長を読み取るための評価指標としてではなく、自身が成長出来たという自己成長感をより具体的に意識させるための手がかりとしての活用有効性については言及することができた。また、今回の研究から、具体的な教育内容とルーブリックの変化に関連が見られたことから、経験や学習を反映させることの可能性を見ることもできた。具体的には、授業内で、重点的に丁寧に学習した部分については、ルーブリックでの変化から、成長感が高い項目として有意差が認められ、反面、授業であまり触れることができなかった項目については、大きな変化をみることはできなかった。この点からも、具体的な教育内容とルーブリックによる変化に相関関係が見られることから、経験による自己成長を図る手法としてはルーブリックの有効性を示すことができた。しかし、これらは、あくまでも学生による自己評価であるため、これがそのまま学生の成長を客観的に図るものではないことを言及する。これについては、査読でも指摘を受け、客観的評価ということは難しいことが明らかになっている。これに対し、園田が行っている授業開示に事前の自己評価を行い、授業終了時に事前での評価を見ながら事後評価を行う手法では、尾崎先生の方式に比べ明らかに上昇率が高くなる。これは、事前のポイント、状況を示されることで、授業を通して成長しているはずだという自己バイアスや成長していなければならないという意識に基づき、起こる変化と考えられる。園田の方式では、評価レベルよりも、示されたレベルに対するコメントに注目するもので、事前を示すことで、自己成長感をより具体化できる効果を持っていることがわかった。例えば、授業開始時は、人見知りや友達以外と話すことに抵抗があると書いていたが、授業終了時には、友達ではない人にも話しかけられるようになったなど、具体的な成長を考える手がかりとして使うことができる。

参照資料:2012年度東海大学紀要教育研究所

第二部 2013 年度学部等研究補助金応募研究発表

(1)スマートフォンを活用した授業内容の構築

岡田工 崔一英

近年、スマートフォンの普及により、多くの学生が持つようになった。これまでも、iPAD を使ったグループワークだけでなく、スマートフォンのアプリを使ったウォーキングのデータ収集など、様々な情報端末を活用した授業の取り組みを行ってきた。さらに、iPad mini など、タブレット端末の小型化、高性能化が進み、さらに、学生所有のスマートフォンの拡大を踏まえ、これらを有効に活用した授業展開の可能性が高まった。そこで、これまでの iPAD などの情報端末を用いた取り組みをさらに発展させ、特にスマートフォンに注目をした授業開発を試みる。具体的には、独自のアプリの開発や既存のアプリの新たな活用を踏まえた授業内容の構築の研究を行う。すでに、グループワークを活かした理科実験教材の開発として日本情報科学教育学会での発表を予定し、さらに私立情報教育学会で、岡田、崔、それぞれ 1 件ずつの発表を予定している。予算は ipod touch を使った wifi 接続にかかる費用や iPad mini、Android 系情報端末、ネットワークスキャナ、モバイルパソコンの購入費用を予定している。



(2)「定点観測」手法を使った実践的取材ノウハウ教育の開発 2 年目」 (継続)

岩田伊津樹

昨年に引き続き、同じ定点への継続的な取材教育の開発を進めたい。今年度は、同じ定点についての取材の中でも、周辺地域への拡大ではなく、原点に戻り、地域社会に密着した取材を進めたい。実際の新聞社の現場取材の多くが定点取材の手法をとっており、実践的教材として定点を活用する上で、限られた地域に密着し、より深めた取材の手法を学生に向けて教育する方法を開発し、実践したい。このような定点に密着した取材体制は、取材の基礎であり、さらに、定点に対し責任を持つことも記者としての基礎的な心構えである。学生にも、自らが担当した定点に対し責任を持ち、その地域の問題点を積極的に発見し、それを言語化し、作品へと高めるプロセスを学んで欲しい。ことから、このような定点観測の手法を用いた教育は、まさに実践的教育として意義深い。

予算は、昨年とほぼ同じだが、交通費への配分を多くしている。



注)上記 2 件の研究計画発表は、2013 年度チャレンジセンター助成研究の審査も兼ねています。